

第 46 回目 主にあって強くあれ (1)

はじめに

●北海道大学の前身だった札幌農学校に 1875 年(明治 8 年)、アメリカから赴任してきたウィリアム・S・クラーク博士がおられました。彼は自分の学生たちに Boys be ambitious 「青年よ、大志を抱け」と言ってアメリカに帰りました。彼はアメリカマサチューセッツ農科大学学長をしていて、札幌農学校に教頭として 8 ヶ月間だけ教鞭をとったそうです。当時の札幌は戸数約 900 戸、人口 3 千人弱でした。この Boys be ambitious. 「青年よ、大志を抱け」という言葉は有名です。すばらしい言葉ですが、おそらくその真意は、Boys be ambitious in Christ 「青年よ、大志を抱け キリストにあって」だと思われます。この in Christ があるのとないのとでは、大きな違いです。クラーク博士の強い影響もあって、第一期生はほとんどがキリスト教に回宗しました。

●その後に入ってきた二期生の中に、内村鑑三と新渡戸稲造がおり、彼らも一期生の影響を受けてクリスチャンとなりました。そもそも札幌農学校は北海道開拓に当たる人材を急造する目的で作られた学校であったので、そこに集まってくる学生は気骨のある人材が多かったようです。卒業後、内村は勤務の傍ら、札幌に教会を建て、札幌基督教会を創立しました。

●その内村鑑三の門下生の一人に神谷美恵子というクリスチャンの精神科医がおられます。ハンセン病患者の治療に生涯を捧げたことで知られる精神科医です。この方は「美智子皇后の相談役」も務められました。一方の新渡戸稲造氏は、前の五千円札の肖像となった人ですが、農学校入学前からキリスト教に興味をもち、自分の英語版聖書まで持ち込んでいたと言います。いずれにしても、この内村鑑三と新渡戸稲造の影響は実に多くの人々に及んでいます。野口英世などもその影響を受けたひとりでした。

●彼らは「イン・クライスト」(in Christ)、「キリストにあって大志を抱き」ました。単に大志を抱いただけでなく、それを実現する力をキリストから与えられたのです。「キリストにあって、大志を抱く」ことと、今回お話しする使徒パウロのエペソ人への手紙の 6 章 10 節のみことばは、同じことを言っているように思います。なぜなら、彼らは(内村も新渡戸も)、キリストから与えられる力によって強められて、大きな影響力を与えたと言えるからです。その力は、今も変わることなく、私たちにも注がれていることを心に留めたいのです。まず今回の聖書のテキストを見てみましょう。

「終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。」(新改訳)

「最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。」(新共同訳)

「最後にひとこと。主に結びつき、主の絶大なる力を受けて強くなりなさい。」(柳生訳)

「最後に言いたいことは次のことである。主を信じ、その大能の力によって強くしていただきなさい。」(尾山訳)

●新改訳では「主にあって」、英語では in Christ というところを、他の日本語訳聖書ではいろいろなニュ

アンスで訳されています。ちなみにそれをまとめてみますと、

- ①「主に依り頼み」(新共同訳)、②「主に結びつき」(柳生訳)、③「主を信じ」(尾山訳)
- ④「主に結ばれ」(フランシスコ会訳)

●この「主にあつて」「主に拠り頼み」「主に結びつき」「主を信じ」「主に結ばれ」ることによって、はじめてその主のもつておられる偉大な力にあずかることができる、主の「マイティー・パワー」(mighty power)にあずかることができるというのが、このテキストの意味です。

1. 「終わりに(最後に、Finally)」のことばが意味すること

●さて、これから何回かにわたって、ゆっくりと、じっくりと、10節以降を学んでいきたいと思いますが、今回は10節のみを味わってみたいと思います。そこで10節の「終わりに言います」ということばを見てみましょう。

- ①「終わりに言います。」(新改訳)、②「最後に言う。」(新共同訳)、③「最後にひとこと。」(柳生訳)、
- ④「最後に言いたいことは、次のことである。」(尾山訳)、⑤Finally (NIV)

●ここで言われている「終わり」とは、これまでこれこれのことを述べてきて、「最後になりました」というあとがきや付け足しのニュアンスでは決してありません。確かに順序としては、最後になったのですが、このことばの真意は、むしろパウロがここで今まで述べてきたことの「総仕上げ」とも言うべきことを語ろうとしているのです。そうだとしたら、「終わりに」としないで、「最後にもうひとつ大切なこととして・・・」とか言ってくれたらいいのに・・・と思うほどです。

●前にもお話ししましたが、ウォッチマン・ニーという人は、このエペソ人への手紙を三つのキーワードで要約しました。それによれば、

- ①「座す」・・・キリストにある私たちの地位がいかなるものか。
- ②「歩む」・・・この世における私たちの生活を、いかに私たちの地位にふさわしく歩むべきか。
- ③「立つ」・・・私たちが座し、それにふさわしく歩むことを妨げようとする敵に対して、私たちがはっきりと取るべき態度とは何か。

●パウロが「終わりに言います。」というのは、これまで語られてきたことをしっかりと自分のものとして生きるために、もうひとつ大切なことがある。それが「終わりに言います」という内容であり、その内実は「**キリストにあつて、強められる**」ことなのです。そのことを別の表現で「立つ」としているわけです。ちなみに、6章11節以降では、「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために」(11節)とか、「堅く立つことができるように」(13節)とか、「しっかりと立ちなさい」(14節)というふうに、三度も「立つ」ということばでたたみかけています。「強められる」と「立つ」ことは同義です。

●パウロはここで、キリストにある「マイティー・パワー」(mighty power)をいただいて、力を得て、敵に対して「立ち向かうべきこと」「堅く立つこと」「しっかりと立つこと」を訴えようとしているのです。しかし、ここで注意したいことは、「座す」と「歩む」と、「立つ」ことの密接な関係です。「歩む」ためには、「座す」ことをしっかりと学ばなければなりません。同時に、「立つ」ためにも「座す」ことから離れることはできません。「座す」ためには、しっかりと「立つ」ことも必要なのです。これらの三つのことはみな密接につながっているのです。その密接なつながりが完成されるための「最後に」なのです。柳生訳の「最後にひとこと」という訳は、少し誤解を招く訳かもしれません。「最後にもうひとつ大切なこと」「それなしには完成しないもう一つのこと」という意味です。ですから、「座す」ということを疎かにして、力を得て「立」とうとしても、おそらく空回りになるだけです。「わたしを離れては、あなたがたは何もできません」と言われたイエシュアのことばを悟らなければなりません。私たちが祝福されたクリスチャンの醍醐味を味わうためには、この三つのキーワード「座す」「歩む」「立つ」を何度も何度も、繰り返し、繰り返し、しっかりと頭と体にたたき込むことが必要なのです。こうして見ると、やはり出発点である「座す」ということがいかに重要かを改めて思われます。しかし多くのクリスチャンはそのことに気づいていないという現実があるように思います。

2. 主にあって、強くあれ

◆もう一度、6章10節を見てみましょう。

聖書には、「主にあって、その大能の力によって、強められなさい。」とあります。「強められなさい」というのは受動態の現在命令形です。その意味は、「主から注ぎ込まれる無限の力によって、いつも、いつも、繰り返して、強められ続けなさい。」ということです。これは、決して、私たちの内から出る頑張りの方ではありません。これを能動態の命令形に言い直すとどうなるでしょう。「強められなさい」が「強くありなさい」となりませんか。もう一度、「強くあれ」で言い直してみましょう。「強くあれ」とは「主から注ぎ込まれる無限の力によって、いつも、いつも、繰り返して、強くあり続けなさい。」ということです。

(1) エペソ書における「力」

●エペソ人への手紙の中には「力」ということばが繰り返し出てきます。さらっと見てみましょう。

①1章19節

神の全能の力の働きによって、私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように

②1章20節

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、

③3章7節

私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。

④3章16節

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。

⑤3章18節

すべての聖徒とともに、その(愛の)広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、

⑥3章 20節

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところの すべてを越えて豊かに施すことのできる方に、・・・栄光がありますように。

⑦6章 10節

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

●ここには信じる者のうちに働く神の全能の力がすでに備えられていることを教えています。その全能の力はまずキリストのうちに働いて、キリストを死からよみがえらせ、天の神の右の座—最高権威—に着かせて、そこからキリストが、ご自分を信じる人々のうちにさまざまな力を与えて、いろいろな働きをさせているのです。パウロもそのひとりで、神の力によって、自分は福音に仕える者とされたと言っています。その働きに必要なすべての力をキリストが与えて下さったからです。そして、あなたがたのうちに働く神の力によって、神は、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施されるのです。

●「強くあれ、雄々しくあれ」という呼びかけが聖書の中にあります。ヘブル語では「ハザク・ヴェ・エマツ」(אָמַץ וְקִיָּה)です。動詞の「強くなる、強くする」は「ハーザク」(קִיָּה)、「雄々しくある、勇気を出す」は「アーマツ」(אָמַץ)です。このことばは神から偉大な指導者モーセに、モーセから従者ヨシュアに、そしてヨシュアからイスラエルの民に呼びかけられました。ヨシュア記 1 章は、モーセ亡きあとに、主がヨシュアに向かって語られたことばから始まります。この言葉の背景には、40 年前にカナンの人々を恐れただこと、約束の地を踏むことができなかったことがあつことを忘れてはなりません。

「強くあれ、雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならぬからだ。」(ヨシュア 1:6)

「強くあれ、雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」(ヨシュア 1:9)

●このフレーズによる呼びかけのパターンは以下の通りです。

- ①「主」⇒「ヨシュア」(申命記 31:23/ヨシュア記 1:6, 7, 9)、②「モーセ」⇒「ヨシュア」(申命記 31:7)
- ③「モーセ」⇒「民」(申命記 31:6)、④「民」⇒「ヨシュア」(ヨシュア記 1:18)
- ⑤「ヨシュア」⇒「民」(ヨシュア 10:25)

●これを見る限り、このフレーズは互いに励まし、信仰を鼓舞する激励用語として使われています。なぜか、聖書では上記の箇所(8回)にしか使われていませんが、特筆すべきフレーズです。

※ちなみに、「努めて狭い門から入りなさい」(ルカ 13:24)というイエシュアのことばがあります。その真意は、実は、「マイノリティ・コンプレックス」に対する励ましです。そこに当てられているヘブル語は「アーマツ」の強意形ヒットパエル態の命令形「ヒットアンメツ」(הִטְּאֲמַץ)です。このフレーズが語られた背景には、目に見える敵に対する「恐れ」がありました(ヨシュア記 1:9)。しかし、ルカの 13 章 24 節のことばの背景にあるものは「マイノリティ・コンプレックス」。つまり、マイノリティ(少数であること)に対する恐れです。それゆえに、「雄々しくあり続ける」必要があるのです。

אגרת שאול אל האפסים

●出エジプトの偉大な指導者モーセが死にました。神様はモーセの従者ヨシュアをカナン征服の指導者として立てられました。彼にすべての民と共に立ち上がり、ヨルダンを渡り、約束の地に行けという使命をくださいました。それは強大な敵と戦い、その地を得る戦争の使命です。従者だったヨシュアが新しい指導者になり、使命を担おうとする時、恐れが生じたことでしょう。しかし神はまずヨシュアに勝利の確信をくださいました。「あなたの一生の間、だれひとりとしてあなたの前に立ちはだかる者はいない。」神がモーセと共におられたように、ヨシュアとも共におられると約束されました。神がお立てになった指導者は自分の力で使命を担うではありません。神が共におられ、その使命を担うようにしてくださるのです。すべての力は神から来ます。神は約束されます。「わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」神が私と共におられれば、どんな敵も私の前に立ちはだかることはできないのです。この信仰に立つことがヨシュアにまず求められました。・・・これは今日においても変わることはない原則です。

●指導者にとって最も必要なものは軍事力や武器ではありません。強くあって、雄々しくあるという信仰の心です。これは敵の前に揺り動かされない心であり、敵を恐れずに戦える勇敢な信仰の心です。このような信仰の心はどこから来るのでしょうか。そのヒントが、きちんと記されています。

3. 無限の力の供給者としてのイエシュアにとどまる

【新改訳改訂第3版】ヨシュア記 1章 7～8節

7 ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行え。これを離れて右にも左にもそれてはならない。それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。

8 この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。そのうちにしるされているすべてのことを守り行うためである。そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。

●「強く、雄々しくある」ということは、律法(「トーラー」 תּוֹרָה)を通して、神との正しい関係を結ぶところから来ます。律法は神のことばであり、みおしえです。御言葉をいつも読み、瞑想し、聞き従う時、神と正しい関係を結ぶようになります。ここに神との関係性が成功する秘訣があります。「昼も夜もそれを口ずさむ」というのが、パウロのことばで言うならば「座す」ことであり、イエシュアのことばで言うならば「とどまる」ことです。みことばをもっともっと瞑想し、口ずさみ、味わうようにしなければなりません。それはキリストに倣う生き方です。キリストのことばをもつとも私たちの心にたくわえましょう。そうするならば、必ず、強くされるです。

Be strong 「強くあれ!!」 そのためには Abide in Christ!!